

神谷沢地区にある羽黒前遺跡。
調査を進めて分かった、「防御施設を伴う、集落」の存在。



特集 羽黒前遺跡 発掘調査



▲羽黒前遺跡の位置図(国土地理院地図)

「羽黒前遺跡(はぐろまえいせき)」は、利府町と仙台市にまたがる形で登録されている遺跡です。利府町では、同地区の宅地造成計画に伴う発掘調査を5月から約5か月間実施しました。(左図のとおり)

羽黒前遺跡は、従来は中世の宗教遺跡と考えられていましたが、調査を進めることで新たな使われ方が見えてきました。

なお、今回の特集では、10月31日現在の発掘状況をお知らせします。



▲これは建物跡から出土した砥石です。鉄を研ぐために使われていたもので、すでに鉄文化が浸透した時代だと特定できます。

Q どうやって年代を特定するの？

出土した土器や砥石等の遺物や、堆積土の特徴を見て特定します。



▲ジョレンによる遺構検出の様子。後ろでは削った土を運んでいます。ニュースで見るとハケを使う作業はほんの少ししかありません。大部分はこうした体力勝負の作業がほとんどです。

Q 発掘作業ってどうやるの？

重機で表土を除去した後、ジョレンという道具を使って少しずつ表土を削り、遺構の音が人が建物などを建てるために掘った跡を探します。遺構の部分は周囲の土とは色や硬さが違うので、それらを観察しながら慎重に掘り進めていきます。

■斜面の建物跡と溝跡

発掘作業では、遺跡の丘陵平面部で3か所の建物跡が見つかり、そこから西の斜面上に7か所の建物跡が見つかりました。2ページ上部の写真は、斜面上にある建物跡の発掘作業の様子です。そして、左の写真のとおり、建物跡を囲むように溝跡が見つかりました。溝跡の長さは65m、幅約1m、深さは最大で50cmほど。周辺から出土した土器などから、溝跡が作られたのは、8世紀後半から9世紀初頭にかけではないかと推察されます。



▲上空から見た斜面の建物跡と溝跡

その時代の東北(陸奥国と呼ばれていました)の国府(役所)は、多賀城にありました。羽黒前遺跡は、多賀城から西に約3kmの位置にあり(羽黒前遺跡の位置図を参照)、遺跡自体が高台にあるので、当時は多賀城政庁を望むことができたかと推察されます。



▲現在の羽黒前遺跡から多賀城方向を望む。利府JCTや、宮城東部衛生処理組合が見え、高台にあることが分かります。

■防御施設を伴う集落の可能性

今回の調査で見つかった遺構が何のために設けられたものかを考えるうえで重要なのが溝跡です。

溝跡は高台の建物を囲む堀、つまり防御施設として作られた可能性が考えられるのです。この当時、大和政権と蝦夷との戦いが激化していました。8世紀後半



▲斜面で検出された建物跡の調査の様子。調査員の手前にはカマドから流出したと思われる炭の層と、須恵器(窯で焼かれた土器)の蓋が見えます。この蓋は内側に墨が付着しており、硯として転用されていたことが分かりました。

には蝦夷の襲撃を受け、国府多賀城が全焼しました。そのような時代背景を考えると、今回の調査で見つかった集落は蝦夷の来襲に対抗するためにあった可能性が高いのです。

建物跡を囲む溝跡は、蝦夷の攻撃を防ぐ堀として作られ、集落の人々は、3km先の多賀城政庁に狼煙(のろし)を上げる等をして蝦夷襲撃を知らせていたのではと考えられます。

今後、出土した遺物や遺構のさらに詳細な調査を行っていきます。最終的な調査結果報告書は令和4年度に完成する予定です。

調査担当者から



教育部生涯学習課 文化振興係 谷野主任

今回の発掘調査は宅地造成により失われる遺跡を記録として保存するために行われたものです。新たな歴史の発見を得られる代わりに、それまで土の中で守られていた遺跡を掘り起こし、最終的に無くなってしまふのは何とも言えない寂しさを感じることがあります。

しかし、調査によって記録保存された遺跡は地域の歴史を伝えるものとして活用されていくことになります。調査後の仕事として、そのように働きかけをしていくことがとても大事だと私は思っています。

発掘調査を通して得られた当時の人々の営みを、その魅力とともに、広く伝えていきたいと考えています。

速報 「羽黒前遺跡発掘調査パネル展」を開催します。

場所：ペア・パル利府(町民交流館)展示コーナー
期間：12月21日(火)から27日(月)まで
観覧無料です。ぜひお越しください。